

発言要旨

2021 年 1 月 4 日

自伐型林業推進協会 中嶋健造

現在の日本林業（標準伐期 50 年の皆伐施業）は、欧州型の大量生産、生産性重視の林業を参考に行っている。欧州等は亜寒帯地域・大陸で平地、日本の温帯地域・島国で地形地質複雑な立地や気象条件は真反対と言える。木材も欧州等はトウヒ中心の中低質材、日本は針広共に多様で複雑立地を利用し高級無垢材が生産できる世界的にも数少ない国だ（生産コストは高い）。

日本の林業においてこうした基本条件の違いも踏まえて問題点は 3 点ある。

- ① 多様な森林資源の有効活用になっていない（特に高品質材）
- ② 経済的に自立していない（現状の低材価では採算が合わず、補助金漬け）
- ③ 土砂災害を誘発している（昨今の豪雨にて）

自伐型林業は、この問題点を解決するために研究開発した手法。「森林組合に委託していたのを自分でやる」という森林組合の補完程度と認識している人が林野庁含め多いようだが、それは全く認識違い。

まず根本的に施業手法が違う。使い続けられる壊れない作業道を敷設し、森の成長量を越えない弱度（2 割以下）間伐生産を繰返し、質と量を増やしていく多間伐施業。壊れない作業道は土砂災害を防ぎ、低材価時でも生産しながら蓄積量を増やすことが経済的自立を可能とする。自伐型林業者はこの多間伐施業の担い手であり、全国で急増中。これが、大面積の森林での就業創出や災害防止、獣害対策等、中山間地域の根本的課題解決に直結する。